

Program Note

第一部

ルロイ・アンダーソン曲集

ルロイ・アンダーソン(1908~1975)はアメリカの作曲家で、身近なものを題材にしたユーモア溢れる曲を多く作っています。それらはとても分かりやすく楽しく、心が癒されます。

■ ブルー・タンゴ (約3分)

1951年、5週続けてヒットチャート第1位を獲得した曲です。「ブルー」の由来は「ブルーノート」というジャズの音階が使われているからだそうです。それは物憂げな(ブルーな)感じのする音階で、主旋律を支えるリズムのメロディに使われています。明るくトロピカルな感じさえるこの曲の魅力は、底に流れるブルーノートにあるのかも知れません。

■ ペニー・ホイッスル ソング (約3分)

ペニー・ホイッスルはアイルランドが発祥とされる素朴な縦笛で、アメリカではアイルランド、スコットランド、イングランド系の民謡によく使われるそうです。今日はフルートとクラリネットでペニー・ホイッスルを表します。心地の良い曲です。

■ 忘れられし夢 (約2分30秒)

当初は初心者向けのピアノ曲として作られましたが、弦楽器を加え、管楽器を加え、そして今の編成になったそうです。「忘れてしまったけど、何かいい夢だったなあ…」ゆったりと心が和む曲です。

■ スコットランドの釣鐘草 (「スコットランド組曲」より) (約3分)

戦争に徴兵されていった恋人を思い、彼の帰りを健気に待つ女性の心境を描いたスコットランド民謡をアンダーソンがオーケストラ編曲したものです。日本でも歌われている曲ですので、ご存知の方もいらっしゃると思います。

■ ワルツィング・キャット (約3分)

猫がすり寄って甘えたり、何かにじゃれたり、ピョンピョン駆けまわったりする様子が楽しい音楽になっています。鳴声も楽器で表現されています。最後は…!

■ そりすべり (約3分)

クリスマスになると定番曲のようにあちこちから聞こえてきますが、もともとはクリスマス用ではなかったそうです。馬の鈴やひすめの音、そしていななきまで入って、馬がソリを引いている様子が楽しく表現されています。

第二部

交響曲 第3番 変ホ長調 作品97「ライン」

ロベルト・シューマン作曲

副題でもある「ライン」とは、ヨーロッパ6カ国を跨いで流れる広大な河川・ライン川を示しています。全長1233kmのうち半分以上を占めるドイツでは、特に重要視されており「父なる川」と呼ばれています。各楽章のモチーフもこのライン川や周辺の地域を描いたと言われています。気軽に海外に行く事が出来ない時世だからこそ、様々な情景が皆様の目に浮かぶように精一杯演奏致します。

■ 第1楽章

ローレライ(ライン川にそびえる大岩)と関りが深い楽章です。序章がなく冒頭から厚みのあるテーマがたっぷりと歌われ、ライン川・ローレライの雄大さが感じられます。実は3/4拍子にもかかわらず、ヘミオラ(リズムの取り方が変わる)手法が取られており2拍子にも感じられるようなユーモアな作りをしています。全楽章の中で最も有名で速度記号: Lebhaft(生き生きと)の通り、生命感に満ち溢れた楽章です。

■ 第2楽章

コブレンツ地方からボン地方までのライン川を表現したと言われています。スケルツォと書かれた楽章ではありますが、ゆったりと演奏され、のどかな風景を彷彿とさせる魅力的な楽章です。最初から最後まで一貫したフレーズの動きがあり、とめどなく流れる川の流れを示しているようです。

■ 第3楽章

2楽章と同様、ボン地方からケルン地方までを表現したとされ、冒頭の柔らかな木管楽器を受け、半音階で上がっていく音型が繰り返し調性を変え現れます。中間部ではヴァイオリンをあえて抜かした中低弦で歌われる、シンプルかつ愛情に溢れたフレーズも印象的です。

■ 第4楽章

ケルンの大聖堂にて、枢機卿就任式に感銘を受けて作られた楽章で、全体を通して荘厳な雰囲気が進んでいきます。パイプオルガンをイメージした非常に息の長いフレーズがカノンのように折り重なり、神聖な響きで全体を包み込みます。唯一短調を基調とした楽章であり、断片的でありつつも嘆きの旋律が至る所で聞こえてきます。

■ 第5楽章

前楽章から一転、非常に活気のある行進曲が始まります。これは、デュッセルドルフ地方の収穫祭からインスピレーションを得ており、トリルや裏拍進行がスパイスとなり、オーケストラを盛り上げていきます。シューマンが好んで使う、上向音形のファンファーレを響かせた後、生き生きとフィナーレまで駆け抜けます。